

立ッ鳥会議第8回公演「トレマ」(作・植松篤)

登場人物

佐倉井周……不動産会社の社員。三十五歳。 〓 佐々木峻一(努力クラブ)  
円山崇……佐倉井の旧友。三十五歳。 〓 豊島祐貴(プロトテアトル)  
佐倉井遥……佐倉井の妻。三十三歳。 〓 中村彩乃(安住の地/劇団飛び道具)  
馳川琥太郎……樋口の恋人。二十二歳。 〓 田宮ヨシノリ  
樋口アヤメ……馳川の恋人。二十二歳。 〓 ぬまたぬまこ  
兼古尚貴……佐倉井の会社の先輩。四十歳。 〓 七井悠(劇団飛び道具)

1

令和のある年。夏。東京郊外の街の、夜の駅前。豪雨。  
佐倉井周と佐倉井遥が厚い雲に覆われた空を見上げている。

佐倉井 現代的な雨だなあ。(間) 現代的だなあ。

遥 どうするの。

佐倉井 どうしよう。

遥 ファミマあるけど。

佐倉井 ファミマ？

遥 傘。

佐倉井 傘ねえ。

遥 傘ねえって、傘でしょ。

佐倉井 いや、また買うのかってね。玄関もうビニール傘だらけだから。

遥 この際、ちゃんとしたの買えばいいじゃん。

佐倉井 そういう考えで買ったのも何本かある。

遥 何それ。

佐倉井 そもそも、傘差してどうにかなる感じじゃない？ 凄いや、雨。

遥 じゃあ、このまま？

佐倉井 このままってことはないけども。マック入る？ でも混んでるよ。

遙 タクシー並ぶ？  
佐倉井 並んでるしなあ。  
遙 このまま？  
佐倉井 いや、うん……。  
遙 ずっと帰らない。  
佐倉井 いや帰らないってことはないけど。  
遙 じゃあどうする？  
佐倉井 でもさ、意外とすぐやむと思うんだよね。だって現代的な雨だから。  
遙 さっきから現代的って何。  
佐倉井 ゲリラ豪雨、現代的でしょうよ。  
遙 現代的って言わないでよ。  
佐倉井 変？ まあ変か。  
遙 時代が良くないみたい。  
佐倉井 まあ、そりゃ天気に関してはね。異常気象みたいなのはこれからどんどん増えてくるでしょ、間違いなく。  
遙 だから、そういうことを言わないでって。  
佐倉井 なんて？  
遙 いるんだから。  
佐倉井 いる？  
遙 そうでしょ。  
佐倉井 ……あ、だよね！ 次世代がね。（遙のおなかに向かって）ごめんねー、怖かったね。でも大丈夫だよ。人間は科学の生き物だからね。何でも解決しちゃうからね。今よりも明るい未来が君には待っているからね！ ……よし。  
遙 何してんの？  
佐倉井 え？ だからちょっとフォローして。  
遙 分かるわけないでしょ。  
佐倉井 ああ……あれ？ なんかごめん、そういう話じゃなかった？  
遙 私が嫌なの。  
佐倉井 ああ……。  
雷鳴。  
佐倉井 わあ、凄いわこれ。結構近いな、しかも。  
遙 ……。  
佐倉井 いや、でも本当に、俺も、いろいろちゃんと考えてるからね。  
遙 何も言っていないけど。

佐倉井　でもなんか言いたいでしょ？  
遥　何を？  
佐倉井　いろいろ。  
遥　じゃあ、なんだと思う？  
佐倉井　だから……大丈夫かなっていう。  
遥　……うん、大丈夫？  
佐倉井　うん、だから大丈夫だって。  
遥　何が。  
佐倉井　その、ちゃんと子供を……  
遥　守る。  
佐倉井　そう。  
遥　悪いものから。  
佐倉井　まあ、そうそう。  
遥　体を張って。  
佐倉井　まあ……そういうこともあるだろうね。  
遥　殺す？  
佐倉井　え？  
遥　悪いもの。殺さなきゃいけなかったら、殺す？  
佐倉井　殺……すよ。  
遥　殺せる？  
佐倉井　それは……。 (再び雷鳴) ちょっと待って、雷凄……でもまあ殺すよ、うん、殺す。だってやるかやられるかだったら、それは殺すんじゃない？　だって正当防衛だもんね。  
遥　どうやって？  
佐倉井　え？  
遥　どうやって殺す？  
佐倉井　それは……グーパンとか……。  
遥　行ける？  
佐倉井　ちょっと待って、急に言われても出てこないって……。  
遥　その時は急に来るよ。  
佐倉井　ええ……。 バット、バットかな、金属バット。  
遥　金属バット？  
佐倉井　それだったらまあ、行けるんじゃない？  
遥　でも運動神経悪いのに。  
佐倉井　運動神経は別にいいでしょうが。野球やるわけじゃないんだから。ボールより頭蓋骨の方が大きいんだから当たるでしょうよ。……なんで運動神経のことまで言

われなきや……。

遥 もし持ってなかったら？

佐倉井 え？

遥 バット。その時。

佐倉井 え？

遥 ずっと持ち歩かないでしょ。

佐倉井 ちよっともう、やめようやめよう。ハルちゃん疲れてるんだよ。

遥 疲れてない。

佐倉井 分かった。もうなんとかして帰ろう。タクシー割り込むから！

ひとときわ大きな雷鳴。辺りが暗くなる。以下、佐倉井はモノローグ。

遥 あ、停電……？

佐倉井 思えば遠くに来たものだ。つい最近までポケモンで遊んでいたと思ったら、いつの間にか結婚していた。次はなんと子供が生まれるという。上出来の日々。それでも雨だけはどうしようもない。特にゲリラ豪雨は。  
シュウちゃん！

突然、暗闇の先から、傘を差し、スーツ姿の円山が現れる。

佐倉井 そう、それは確かに、ゲリラ豪雨の中から生まれ出たように見えた。雷鳴とどろく不安定な大気を結んで、それはゆらりと影を成していった。そう見えた、確かに。

円山 シュウちゃん！ シュウちゃんだろ！ 俺だよ、俺！ 覚えてるでしょ？

遥 え、誰？

佐倉井 ……（円山に）マルちゃん。

円山 そうだよ、円山だよ！ 円山。いやあ、久しぶりだなあ。びっくりしたよ。こんなところで会うなんて！

佐倉井 この世が完璧であったことなどなかった。だから自分も、不安定で不格好な街に生まれた。東京から遠く離れたその街で、彼と私は出会い、幼い時を一緒に過ごした。記憶は遠い。

円山 シュウちゃん、東京にいたんだな！ 驚いた。でも一目で分かったよ！ だって全然変わってないから！

遥 ねえ、タクシーは？

佐倉井 そう、私も彼のが一目で分かった。大人になっても変わらぬ面影。声のトーン。笑顔。そう、私たちは唯一無二の親友だったのだ。

円山  
おい、どうしたんだよ！ 変な顔して。

佐倉井  
しかしこの時、ある確信が私の胸を貫いた。その確信には理由がなく、それが意味するところすら正確には分からない。だが、それはまさに確信としか言いようのない衝撃と共に、私の脳裏に強く焼き付いた。ああ、マルちゃん、現代的な雨を背景に、傘の中で笑う君は、君はきつと……本当の君ではないのだね。

場転。

## 2

卓上ベルのチーン音。兼古が鳴らしたのだ。  
あれから少し日が経った後。居酒屋の喧噪。兼古が一人、テーブル席に座っている。入店してから既に時間が経過している。

兼古  
（店員に）すいません、お冷や二つ。

ややあって佐倉井、戻ってくる。酔った様子。

佐倉井  
（着席し、卓上ベルを鳴らそうとする）

兼古  
あ。

佐倉井  
はい。

兼古  
お水は頼んだ。

佐倉井  
あ、ありがとうございます。

兼古  
あのね、飲み過ぎだと思うよ。

佐倉井  
すみません、なんか、飲んじゃいました。

兼古  
明日、仕事大丈夫？

佐倉井  
いや、それは大丈夫です。何かあったら兼古さんをお願いしますから。

兼古  
おい。

佐倉井  
嘘です、すみません。あ、何か仕事の話ありました？

兼古  
ないよ、そんなの。

佐倉井  
そうですか。

兼古  
それはいいんだけどさ。もう一回、一から説明してもらっていいかな。

佐倉井  
……はい。ええと、

兼古  
佐倉井君。君は先日、昔のお友達と久々に再会した。

佐倉井  
そうです。

兼古　　ここ東京で。

佐倉井　はい。びっくりしました。

兼古　　何年ぶりに？

佐倉井　中学卒業以来なので、ちょうど二十年ぶりくらいです。

兼古　　仲良かったの。

佐倉井　はい、とても。

兼古　　いいじゃない。

佐倉井　はい。

兼古　　……それで？

佐倉井　何かが変なんです。

兼古　　変なの。

佐倉井　多分、普通の人間じゃないんです。

兼古　　彼が？

佐倉井　はい。

兼古　　……それは、幽霊的な？

佐倉井　いや、幽霊っていうか……（間）。

兼古　　その彼は半透明なの？

佐倉井　いや、半透明ではないです。

兼古　　佐倉井君にしか見えてないみたいなの。

佐倉井　そんなこともなさそうですね。

兼古　　影がない。

佐倉井　影まではちょっと覚えていないですけど、まああるんじゃないですかね。

兼古　　ごめんね、こういう感じの質問が的確かは分からないんだけど。

佐倉井　大丈夫です。自分でもよく分からないんです。

兼古　　それは困るんだけどね。それで、佐倉井君は私にどうしてほしいのかな。

佐倉井　とりあえず、信じてほしいです。

兼古　　君の話を。

佐倉井　はい。

兼古　　幽霊を見たの。

佐倉井　幽霊とは言ってません。

兼古　　タヌキ？

佐倉井　分かりません。

兼古　　分からないけど、君が再会した幼馴染みは、なんか変だと。

佐倉井　はい。

兼古　　君はそう思うと。

佐倉井　変なんです。

兼古 その変さが私には今のところ一切伝わってない。

佐倉井 なんですか。

兼古 今のところ特に引っかかりがない。

佐倉井 えー、どうしよう。

兼古 ただ、君の気持ちは分からなくもない。久しぶりの再会でとまどってしまふ。でも、それ自体は普通のことだよ。「男子三日会わざれば刮目して見よ」。刮目して見なさい。

佐倉井 何でしたっけ、それ。

兼古 人は三日も会わなければ変わっている。ましてや二十年なら。それが君の違和感の正体だよ。

佐倉井 確かに、大人になったんだなと思いました。

兼古 そういうことだよ。

佐倉井 いや、違うんですよね……。あ。ありました！ 変なところ。

兼古 あった？

佐倉井 あれからもう一度、会ったんですよ。

円山 シュウちゃん！

と、先日の午後。佐倉井は再び円山に声をかけられる。円山は最初と同じスーツ姿だが、巨人の帽子をかぶっている。

佐倉井 マルちゃん。

円山 また会ったじゃん。

佐倉井 おお……。

円山 え、この辺で働いてるの？

佐倉井 おお、そうそう。

円山 へえー。なんの仕事してるの？

佐倉井 なんの？ まあ……なんだろう、不動産関係というか。

円山 えー、シュウちゃんそんなんできんの。

佐倉井 まあ、一応……。

円山 凄いなあ。びっくりだわ。でも、そっか、随分経つもんなあ。

佐倉井 ……。

円山 ん、どうした？

佐倉井 あ、いや……。

円山 え、何よ、なにになに。

佐倉井 その帽子……？

円山 あ、これ？ これ、どうかした？

佐倉井 あ、いや……ファンだったっけ？

円山 いや、ファンとかではないけど……変かな。

佐倉井 いや、変というかなんというか。

円山 てか、シュウちゃんごめん、今仕事中か。

佐倉井 いや、仕事というか昼飯中だけど。

円山 そりゃ駄目だ。ごめんね邪魔しちゃって。またね、また。

佐倉井 あ……。

円山が去り、再び居酒屋。

佐倉井 そういふ感じで。

兼古 ……ん？ ん？ ごめん、どういふこと？

佐倉井 兼古さんはスーツに巨人の帽子かぶってる人、見たことありますか？

兼古 それは……ないけどもね。

佐倉井 ですよね。おかしいですよね。

兼古 確かに変だとは思う。ただね。

佐倉井 はい。

兼古 えーとね、まずちょっと思ってた変と違うといふのと。

佐倉井 どういふことですか。

兼古 まあ、それは一旦いいとして、同じくらい変な人はそれなりに見たことがあると思うんだ。

佐倉井 どんな人ですか。

兼古 それこそ服装が多少独特な人なんかいっぱいいるじゃないですか。

佐倉井 はい。

兼古 あ、あれとかね。夜、下全開で道ぶらぶら歩いてて。露出狂。もはや服装自体がないっていふ。これはもう同レベルどころか、明らかに上でしょ。だから、それくらいは現実にゴロゴロいるわけですよ普通に。

佐倉井 ……それって本当に上ですかね。

兼古 どういふことかな。

佐倉井 そんなベタな露出狂、そんなに上ですか？ そんなに変な人ですかね。むしろあの意味、凄く普通と言えるんじゃないですか？

兼古 ……うん、その話は今はいいかな。

佐倉井 なんです。そこ大事でしょ。

兼古 深い話になっちゃうから。

佐倉井 何がいけないんですか。

兼古 深い話ってあんまり意味ないから。そういうものだから。



佐倉井 そんな……。

兼古 いずれにせよ、私が言いたいのはね、佐倉井くんが言うことは、私が不思議な話を信じる根拠にはほど遠いということなの。

佐倉井 じゃあ、帽子はなんだっていうんですか。

兼古 そんなの私に言われても分からない。

佐倉井 でもおかしいですよ？

兼古 もしかしたら、何らか理由があるかもしれないしね。

佐倉井 理由ってなんですか。

兼古 それは……例えばだけど、スーツなんだから仕事の関係とか、ちゃんと事情がある可能性だってあるわけで。

佐倉井 仕事？

兼古 (思い直し) いや、仕事っていうか。

佐倉井 仕事って何ですか。……読売の人ってことですか。

兼古 いやいや。

佐倉井 読売の人って巨人の帽子かぶって働くんですか。

兼古 そんなことはないと思うけど。

佐倉井 読売って変な会社ですね。

兼古 あんまり、よその悪口言わない方がいいかな。

佐倉井 でも仕事って言ったの兼古さんですよ。

兼古 仕事とか、って言ったから。例えばの話だから。

佐倉井 ……実際、可能性ありますか？ 仕事。

兼古 もういいよ。やめよう。

佐倉井 え、なんですか。

兼古 悪かったよ。やっぱり違うと思う。

佐倉井 もうちょっと考えませんか。

兼古 どうかなあ。

佐倉井 スーツ、野球の帽子。

兼古 いくら球団の親会社でもそんな服装規定はないでしょう。

佐倉井 他の可能性ありますか？

兼古 うーん、逆に小さな会社とか？ ワンマンの社長がもの凄く巨人ファンで、社員

にはみんな帽子をかぶせてる。

佐倉井 ありますか？

兼古 まあ、ないとも言い切れないよね。巨人とか阪神とか。個人的には広島ファンが

一番そういう会社やってそうだけどね。地元とかだけだね。広島ファンって結構

タチ悪いからね。まあ、ほぼイメージだけだね。

佐倉井 ……やっぱり仕事とかそういうのとは違う気がしますね。

兼古

ほら見なさいよ。結局、私が広島ファンへの偏見を露呈するだけで終わっちゃったじゃないか。

佐倉井

すみません。

兼古

じゃあ、やっぱり彼は幽霊か。そうはならないと思うけど？

佐倉井

自分でもよく分からないことを言ってると思いますよ。こんなこと、お酒入ってないと話せないですよ。

兼古

でも、お酒が入ることで話の信用性も落ちるからね。

佐倉井

えー。そんなふうに聞いてたんですか。

兼古

お酒というのはね、全てにおいてそういうものだから。

佐倉井

どういことですか。

兼古

できてはしまいがクオリティは下がる。

佐倉井

あ、なんかそれっぽい。

兼古

何でも話せるが中身は軽くなる。告白しやすくなるが告白は軽くなる。眠りやすくなるが眠りは浅くなる！

佐倉井

おお。

兼古、それっぽいことを言った勢いで卓上ベルを鳴らす。チーン！

兼古

(やって来た店員に)あの、お冷や頼んだんですけど全然来なくて……。はい、二つ。お願いします。

(間)

兼古

一つ確認してもいいかな。

佐倉井

はい。

兼古

その彼は亡くなっているわけではないんだよね。……だって、亡くなっているんだっけ。それ言うもんな。その時点で明らかにおかしいんだから。でも、そういうわけではないと。

佐倉井

死んだという話は聞いていません。

兼古

うん。でも、君の話を信じるなり、その彼は実は亡くなっているということにならないかな。いや、私は基本、この手の話は信じないけども、仮に君の話を、その、幽霊的な話を信じるとするとだよ。いや、幽霊と呼ぶかは別としてもね。そう考えるのが、なんというか……自然ではないかな。

佐倉井

……死んだんですかね。

兼古

死んでる可能性はある？

佐倉井

どういう意味ですか。

兼古 いや。

佐倉井 でも、訃報はさすがに耳に入るとは思います。

兼古 親友だから？

佐倉井 はい。

兼古 そんなに仲、良かったの。

佐倉井 まあ……。

(間)

佐倉井 すみません、もう一杯飲んでもいいですか？

兼古 ええ？

佐倉井、卓上ベルをチーンと鳴らす。場転。

### 3

馳川と樋口は二人で住む新居を探しており、物件の内見をしている。

馳川 え、めっちゃ綺麗じゃない？

樋口 ちゃんと見てよ。

馳川 今までと全然違うじゃん。決まりでしょ、こんなの。

樋口 だから……。

馳川 あれだ、ちょうどリフォーム入ったって言ってたじゃん。ここ当たりだって絶対。

樋口 十分広いし。素晴らしい。

馳川 でも、建物はめっちゃくちゃ古いから。絶対何かある。

樋口 いやいや、絶対って……。

馳川 エアコンも古い(と、壁掛けリモコンのボタンを押す)。

風を待つ二人。

樋口 風来てる？

馳川 来てる来てる。

樋口 来てないよ。

馳川 来てるって。

樋口 嘘。

馳川 この辺(上の方)には来てるから。  
樋口 本当に？

馳川 スイングすればいいじゃん(と、ボタンを押す)。  
樋口 ……ああ。

馳川 でしょ？

樋口 なんかも冷えてない気がする。

馳川 ……アヤちゃん、もうずっとそうじゃん。気にしすぎとかさ。今どき、そんな住めないような家なんかないって。だいたい別に賃貸なんだから。こういうのは二人で一緒に住もうってなって、フリーリングでパッと決めるものなんだった。なんたって、お金がないんだから。

樋口 そうだよ。お金があって、高級タワマンにでも住めるなら、何も考えなくても問題ないの。そういうところは基本、何も問題ないし、全部整ってるから。お金がない人は手間と時間をかけなきゃいけないの。  
いやいや…タワマンで。

樋口 何よ。

馳川 発想が安すぎて。

樋口 何が悪いのよ。

馳川 あのね、そんなこと言ったらタワマンにはタワマンなりのデメリットがあるの。エレベーターが渋滞したり、住民のマウント合戦があったり、維持費がめちゃくちゃ高かったり、そんなに良いものでもないんだから。知らずに買って後悔する人だっていっぱいいるんだから。そんなタワマンにね、馬鹿みたいに憧れるのが庶民だって言ってるの。

樋口 うわー……だせえ。

馳川 は？

樋口 聞いたような話、自分の中で膨らませて。あのね、タワマンの悪口は買える人しか言っちゃいけないの。庶民なら素直に憧れとけ。  
憧れとけて……そんな命令ある？

樋口、ビー玉を床に置き、じっと見つめる。

馳川 それは何、傾いてないか確認してるの。

樋口 見れば分かるでしょ。

馳川 いちいちやったら日が暮れるって。

樋口 ここは特に古いから。

馳川 だとしてもさ。

地震が来た時に傾いてたらどうするの？

馳川 来ないよ、地震なんて。  
樋口 来るよ。

馳川 地震は来るけど、来たらもう仕方ないじゃん、それは。どうせ終わりなんだから。  
樋口 てか突っ立ってないでいろいろチェックしてきてよ。  
馳川 いろいろって何。

樋口 あのさ、内見初めてじゃないよね？

馳川 もちろん。何件も連れ回されてるからね。

樋口 水回りとか。

馳川 水回りって？

樋口 だから、洗面台が壊れてないか、水がちゃんと出るかとか。

馳川 水出ないことないでしょ、人に貸そうってのに。

樋口 水圧が弱いとか、あるから。

馳川 気にしすぎだって。

樋口 後から文句言ったって手遅れなの。分かってる？

馳川 分かった、文句とかは絶対言わない。そもそも別にこだわらないけどね。家の設備なんて、屋根さえあればいいと思ってる人だけど、万が一不満を感じたとしても、それは黙ってるから。それはそうだよ、不満言う資格はないからね。それくらい分かってるよ、俺だって。それは絶対大丈夫。

樋口 ……そういうことじゃないでしょ。

馳川 何がよ。

樋口 二人で生活始めようってのにさ。

馳川 そうだよ。それは分かってるよ、俺だって。

樋口、再びビー玉を見つめる。

馳川 ……ちょっと待って。よく知らないんだけど、それって、そんなにじっくり見るものなの？

樋口 何が。

馳川 飯によ？ 今からそのビー玉が転がりだしたら、それはマジでヤバイよ。だって傾きじゃないもん。それはもう、別の現象だもん。それはもうヤバイ何かだから。

樋口、ビー玉を拾い上げる。と思いきや、またそばに置くこととする。

馳川 嘘でしょ嘘でしょ……。

樋口 なんか気になりだしちゃったな。

馳川 一緒だってそんなの、もう許して……。

樋口 場所が違ったら駄目かもしれない。  
馳川 うん、だとしたら、床がどういう形だと想定してるの？ それがちよっと分かんないんだよな。……あの！ すいません、不動産屋さん？ 不動産屋さん？  
佐倉井 ……は、はい！

佐倉井、慌てて出てくる。

佐倉井 はい……はい！。  
馳川 ちよっと、あなた、何でそんなところでポーツしてるの。  
佐倉井 すみません。  
馳川 何、大丈夫？  
佐倉井 あ、はい。  
馳川 何してたの？  
佐倉井 あの……あつ。玄関の状態とか見てました。  
馳川 いや、横目で見えてたからね。ずっと突っ立ってたでしょ。  
佐倉井 すみません。  
馳川 凄いがまかすじゃん。あと、「あつ」とか言ったら絶対駄目だから。だってその時点で考えちゃってるじゃん。気をつけて。  
佐倉井 ええ。  
馳川 ええ、でもないけどね。  
佐倉井 すみません。  
樋口 向こう見てくる。

樋口、退場。

馳川 ほらもう、自分勝手に……。凄いでしょ。あれ、彼女なんですよ。  
佐倉井 はあ……。  
馳川 向こうから見ますか。  
佐倉井 あ、ええ。

馳川、退場。佐倉井も退場。

4

その夜。佐倉井夫婦の自宅。リビング。

遥がテレビを見ている。

佐倉井が入ってくる。佐倉井はスーツから部屋着に着替えていく。

遥 ねえ、

佐倉井 (着替えている) うん……。

遥 どう？

佐倉井 え？

遥 昨日の話。

佐倉井 あ、ごめんごめん。検査ね。

遥 見られるよ、多分、次。

佐倉井 え？

遥 おなかの中。

佐倉井 そうか。え、めっちゃ見たい。

遥 多分、土曜だけ。

佐倉井 土曜かあ。

遥 私も仕事あるし。

佐倉井 そうねえ。土曜ね。予定見てみるけど、客商売だから。

遥 別にいいよ。来れなかったら。

佐倉井 まあ、また話すよ。

(間)

遥 なんかさ。

佐倉井 え？

遥 私になるやつ？

佐倉井 ん？

遥 (笑って) お疲れ？

佐倉井 いや、そういうわけじゃないんだけど。

遥 どういう人なの？

佐倉井 え？

遥 この前会った。

佐倉井 ああ……。昔の同級生というか、幼馴染みというか。

遥 へえー。どんな人？

佐倉井 どんな人？

遥 うん。

佐倉井 どんな人……。あんまり覚えてない。

遙 え、覚えてないの？  
佐倉井 覚えてたくない？ 別に、そんなもんな、と思うけど。

などと言いつつ佐倉井、退場。遙も反対側に退場。以下、ハケからの台詞も交ざる。

遙 親友なのに？

佐倉井 え？

遙 言ってなかった？

佐倉井 ああ、言ったかな。

遙 だって、仲良いみたいな感じじゃなかった？

佐倉井 当時はそうかもしれないけど。でも、ねえ。

遙 でもって……。

5

夜の路上。家のシーンのすぐ後。佐倉井はコンビニから帰ってくるところで、ビニール袋を提げている。車の行き交う音。ややあって、円山が佐倉井の背後から現れる。スーツに短パンなど、非常識でちぐはぐな格好をしている。

円山 シュウちゃん。

佐倉井 うわ。

円山 また会った。

佐倉井 ああ……え？ (困惑している)

円山 どうした？

佐倉井 いやいや。

円山 この辺、住んでるの？

佐倉井 ああ、まあ。

円山 今、暇？

佐倉井 え？

円山 時間ある？

佐倉井 あ、いや……。

円山 仕事でもないでしょ。

佐倉井 まあ……。

円山 (石垣に座り) いや、せっかくだからさ、同窓会。ちょっとだけ。



佐倉井 ああ……うん……（ためらいながらも隣に座る）。

円山 （手持ちのリュックから缶のコーラを2本取りだし）飲む？

佐倉井 え？

円山 1本。

佐倉井 ああ……ありがとう。……（ビニール袋からフリスクを取り出し）要る？ フリスク。

円山 え、いいの？ ありがとう。（どいって、手を出すがケースごと置かれ）え？ 全部？

佐倉井 開けてないから……。

円山 いいの？

佐倉井 あの、コーラもらったから……。後で食べて。

円山 そう？ ありがとう。

二人、コーラを開けて飲み始める。乾杯などするかもしれない。

帰ってる？

え？

円山 地元。

佐倉井 あ、いや、全然……。

円山 人減ったよ。

佐倉井 そっか。

円山 出て行くばっかで。

佐倉井 うん。

元から寂れた街だったけどさ、今じゃろくに人もすれ違わないよ。店も閉まっちゃやし、近所の公園のブランコのロープは切れたまんまだし、年寄りばっかで子供は見ないし、あとなんだ、団地の壁も塗り直されないし、コンクリートは舗装されないし。

円山 うん。

佐倉井 あれ覚えてる？

円山 え？

佐倉井 「トレマ」

円山 トレマ？

佐倉井 止まれが業者のミスでひっくり返ってるやつ。

円山 あ……あー。

佐倉井 思い出した。

円山 うん。

佐倉井

円山

佐倉井

円山

佐倉井

円山

佐倉井

円山

佐倉井

円山

佐倉井

円山

円山 あれ、まだそのまんま。  
佐倉井 え？

円山 うん。

佐倉井 それ、いいの？

円山 分かん。

佐倉井 え？

円山 分かんでしょ。

佐倉井 うん、まあ……。

円山 しかし暑いな……。

佐倉井 うん……。 (それを聞いて、円山の服装に目が行く)

円山 どうした？

佐倉井 あ、いや……。

円山 なにか気になる？

佐倉井 あ、この前、帽子してなかった？

円山 ん？ そうだっけ。あ、でも今日も持ってるよ。

佐倉井 ああ……。

円山、リュックから帽子を取り出してかぶる。昔のヤクルトスワローズの帽子。

佐倉井 昔のヤクルトだ……。

円山 ん？ 帽子。

6

その夜。佐倉井と兼古の通話。

佐倉井 ねえ、どう思います？

兼古 いや、どう思いますって言われても……。

佐倉井 絶対変でしょ！ だって。

兼古 いや、変かもしれないけどね。

佐倉井 何が引っかかるんですか。

兼古 そもそも私、一度も見てないからね？ その人。

佐倉井 だからこうして話してるんじゃないですか。

兼古 写真か動画ないの？

佐倉井 え？

兼古　　そういうの見れば分かるかもしれない。  
佐倉井　　なんて言ってるんですか。様子が変だから撮らせてって言うんですか。  
兼古　　いやいやいや、普通に仲良く自撮りすればいいでしょう。画面の方のカメラで。  
佐倉井　　いい年の男2人で撮りますか？  
兼古　　それは撮るでしょう。SNSでも見なさいよ。馬鹿みたいに撮ってるのいっぱいいるじゃない。  
佐倉井　　かもしれないですけど、でも……写ってなかったらどうします？  
兼古　　は？  
佐倉井　　だから、写ってなかったら。  
兼古　　その人が？  
佐倉井　　例えばですよ？  
兼古　　2人で撮ったはずが、画面の半分は佐倉井君だけ写ってる。  
佐倉井　　だとしたら、ちょっと冷静でいられないじゃないですか。  
兼古　　いいじゃない。それならいろいろ確定で。  
佐倉井　　……それ見せたら信じます？  
兼古　　そりゃね。いや、でも、わざと1人で撮った可能性も否定できないからね。  
佐倉井　　……どういことですか。  
兼古　　あ、いや、  
佐倉井　　兼古さん、それはちょっとないんじゃないですか。  
兼古　　違う違う、そういう意味じゃない。  
佐倉井　　それもう私と兼古さんの信頼関係の問題じゃないですか！  
兼古　　そうじゃない。理屈を言っただけだから。  
佐倉井　　理屈ってなんですか。  
兼古　　私はね、まだ自分の常識を超えられてないんだよ。  
佐倉井　　なんで分かってくれないんですか！  
兼古　　ああもう、うるさい！  
佐倉井　　……。  
兼古　　だいたいなぜ私に……。  
佐倉井　　すみません。でも兼古さんしかいないんですよ。  
兼古　　私は無神論者なんだ。宗教や不思議な話は基本的に信じない。  
佐倉井　　そうなんですか。  
兼古　　そうだ。だから死ぬのが凄く怖い。君に私が救えますか？  
佐倉井　　それはなんか、すみません。  
兼古　　分かればいいんだ。  
佐倉井　　はい。  
兼古　　……佐倉井君。

佐倉井

なんですか。

兼古

君は何を恐れている？

佐倉井

え？

兼古

この不可思議な現象に？ 大いなる違和感に？

佐倉井

まあ……はい。

兼古

君が恐れているのは、彼自身ではないのか？

佐倉井

……どうということですか。

兼古

私にはそう思えなくもない。

佐倉井

どういう意味ですか。

兼古

さあ、そこまでは。

佐倉井

そんな、自分から言っといて。

兼古

違うならいいんだよ。ただね。

佐倉井

ただ？

兼古

私はもう寝ます。おやすみなさい！

7

数日後。樋口と馳川が立っている。別の内見先。

樋口

うーん。

馳川

いいじゃん。

樋口

どこが。

馳川

近いし、駅から。

樋口

近い？

馳川

近かったでしょ。書いてあったじゃん。今車で来てもすぐだったし。

樋口

それはいいんだけど。

馳川

じゃあ何。

樋口

……。

馳川

いやまあ汚いけどさあ……。だから前のところにしとけば良かったと思うけど、

樋口

でもここはここで相応だと思うけどね。汚くて逆に信用できるといふか。見たま

馳川

んまでいいんじゃない？

樋口

出るな。

馳川

え？

樋口

ここ出ると思う。

馳川

……お化けが？

樋口 うん。先に言うておくけどマジだから。ふざけてる場合じゃないから。

馳川 いや、それは分かったけど。

樋口 なんかも隠してると思う。

馳川 それは人が死んだとかそういうこと？

樋口 うん。

馳川 分かった。でもそれは問題ない。

樋口 なんで？

なぜなら、事故物件というのは必ず告知しないといけないから。人が死んで何年か経つまではちゃんと言わなければいけない。つまり、不動産屋は出るところは分かっているし、何年か経つまでは「ここ出ますよ」って教えないと駄目なの。分かる？ 万が一、黙ってて後からバレたら、その時は金もらえはいいいじゃん。金もらえればとりあえずはいいいじゃん、ね。

樋口 そのさ、告知？ 死んで何年ってのは何年？

馳川 あ、それはちょっと覚えてないけど。

樋口 その何年か経ったら出なくなるの？

馳川 え？

樋口 突然？ その何年かちょうど？

いや、それは……ゆとりはあるんじゃない？ だいたいもうちょっと早くいなくなるけど、余裕の期間はあるってことだと思うよ、それは。世の中、なんだってそうでしょ。

樋口 そもそもさ、なんでいつかはなくなる前提なの？

馳川 え？

樋口 それ自体合ってる？ 誰が確認したの？ 絶対本当になくなるの？

馳川 ずっとこんなところいたってお化けの方だって困るでしょうよ。

樋口 全部、人間の都合で決まってない？

馳川 そんなことないって。

樋口 じゃあ、本人に聞いたわけ？ いつ出なくなりますかって。

馳川 お化けに？

樋口 うん。

馳川 お化けはね……いません。

樋口 ええ？

馳川 そんなもんはいません。

樋口 ちょっといる前提で話してなかった？

合わせてたの！ でもいいです。いるわけないでしょ、そんなもん。あのね、多少汚いのはそりやしょうがないよ？ だって金がないんだから。話にならないわ、こいつ。

馳川 ちよっと不動産屋さん？ 不動産屋さん？

憔悴気味の佐倉井、入ってくる。

佐倉井 はい。

馳川 だから、なんでそっちにいるの？

佐倉井 何かありました？

馳川 いや、こっちだいたい揉めてたけど。

樋口 もうここはいいから。

馳川 ちよっと待ってって。(佐倉井に) なんとか言ってくさいよ。お化けなんていないって。

佐倉井 あ……なんかちよっとタイムリー。

馳川 はあ？

樋口 (馳川に) だって、全然真面目に考えてないじゃん。

馳川 考えてるよ。大丈夫だって。二人きりだから！ 俺だってお化けいたら嫌だよ。

怖いからじゃないよ。なぜならアヤちゃん二人きりで過ごしたいからね。万が一お化けが来ても俺が追っ払うから。ね、さあ二人で楽しく暮らそう！

佐倉井 ……。

樋口 先、出てるから。

樋口、退場。

馳川 (佐倉井に) 今さ、辛うじて上手くまとめた？ 俺。どう？

佐倉井 ……あの、途中からすぎてちよっと(話の流れが)。

馳川 だからなんで途中からのよ。それがまずおかしいでしょうよ。

佐倉井 はい、すみません。(フラつく)

馳川 ……あれ？

佐倉井 はい。

馳川 大丈夫？

佐倉井 何ですか。

馳川 なんか、しんどい？

佐倉井 いや、別にそんなつもりは……。あの、彼女さん、行っちゃったんで。

馳川、退場。佐倉井も、フラフラと退場。

数日後。日中。佐倉井夫婦の自宅の前。遥と兼古。

遥 (菓子折りを持っている) すみません。お気遣いいただきで。

兼古 いえ、とんでもない。こちらこそ、突然失礼しました。(菓子折りは) 驚異的に日持ちしますので、いつでも召し上がっていただいて。

遥 やっぱり起こしましょうか? こんな時間から寝て、また夜中起き出すと思うんですけど。

兼古 いやいや、それじゃこっちが迷惑かけにきただけですから。

遥 そうですか。

兼古 変な病気でないなら良かったです。

遥 本当にご迷惑おかけして。

兼古 仕事なんて休んでなんぼですよ。

(間)

遥 あの。

兼古 はい。

遥 なんか聞いてますか。彼から。お友達のこと。

兼古 ああ……。そうですね。雲をつかむような話で。私もちょっと分からなくて、お化けと何とか、その辺は。

遥 お化け?

兼古 いや、お化けと言ったかどうか。……。あれ、もしかして全然聞いてないですか。

遥 言わない方がよかったですかな。

兼古 お化けだと思ってるんですか?

兼古 ごめんなさい、お化けじゃなかったと思うんですけど。でもオカルトな何かというか。いや、分かんないですけどね。お酒とか入ってましたし。

遥 信じますか?

兼古 まさか……。

遥 一つだけ気になっていて。

兼古 为什么呢。

遥 親友という割に、今までずっと会ってなかったの、そんなものかなって。

兼古 なるほど。確かに。

遥 男の人の感覚ってよく分からないですけど、学校が別々になって、仕事で東京に

来たからって、そんなに会わなくなるんですか。多少遠くても、たまには地元に戻って会わないものですか。

兼古 あー。私はちょっと事情が違うので分かりませんね。

遥 ご出身、東京ですか？

兼古 いえ、親友がいないんです。

遥 ……すみません。

兼古 いえいえ、誰も悪くないです。ずっと、誰も悪くないです。

遥 ……。

兼古 どこなんでしょうね。

遥 何がですか。

兼古 お友達、この辺りに住んでるんでしょうけど。

遥 ああ。

兼古 聞いてませんか。

遥 そういえば。

兼古 ……暑いですねえ。

9

夜。車の行き交う音。馳川が車を運転している。

樋口は助手席から外を見ている。

樋口 ここらへん。

馳川 停める？ ここ大丈夫か？ レンタカーで駐禁取られたくないんだけど。

車を路肩に停める馳川。しばしの間。断続的に行き交う車の音。

馳川 この辺、好きだなあ。…：ほどよく雑然として、東京の住むところって感じがして。綺麗すぎず、不便でもなく、何て言うか、わきまえてる、街として。街が何かをくれるわけではない代わりに、街から何かを求められることもない。人は勝手に生活し、街も勝手に変わっていく。その街も、誰か一人に変えられることはない。名前のない街。生き物としての街。

樋口 (外を見ている)

馳川 聞いている？

樋口 聞いてない。

馳川 オッケー、だいたい分かった。



樋口 何て？

馳川 だから……もうこの辺でいいじゃん、住むの、ってこと。物件もちょうど良さそ

樋口 うなのいっぱいあったじゃん。決めようよ、もう。

馳川 いや、普通に候補だよ。だからチェックしてるんじゃない。

樋口 何を。

馳川 治安。

樋口 治安ってそんな……。

馳川 治安、大事でしょ。

樋口 大事だけどさ、ここから見てて分かる？

馳川 いないかどうか見てるんじゃない。

樋口 ……誰が。

馳川 まあ、変態？

樋口 変態って……。

馳川 変態いる街だったら困るでしょ。

樋口 そうだけどさ……。

樋口、双眼鏡を取り出して覗いたりしてる。

馳川

それが変態でしょ……。うん、ようはさ、君が言いたいの犯罪率とかってこと  
でしょ。それはさ、データで見ればいいじゃん。てか見なきゃ駄目じゃん。今ネ

樋口

ットでなんでも見れるんだから、すぐ分かるって。

馳川

じゃあ帰ったら調べてくれる？

樋口

調……べるよ。

馳川

ほら、口だけ。

樋口

調べる、調べるよ。調べるけど、俺が頑張ってるってそういうことしても結局なんか難

馳川

癖つけてくるじゃん。それが嫌なの。

樋口

言い訳ばかり。

馳川

……だいたい、世の中変態なんかどこにでも一人はいるんだから割り切るしかな

樋口

いって。

馳川

そんなことないでしょ。

樋口

あるある。だいたい、いなそうなところについてこそ真の変態だしね。

馳川

変態がいなそうなところには真の変態がいる。つまり、変態はどこにでもいる。

樋口

だから諦めるしかない。まあ、逆に言うと、変態がいそうなところにいる変態は

馳川

もはや変態ではないのかもしれないね。

樋口

……じゃあ、そこには変態がいなくてことになるじゃん。

馳川 ある意味ね。じゃあ、そういうところ探す？ ただただ治安が悪いところだと思  
うけど。

樋口 あのさ、言葉遊びやめてくれない？

馳川 変態がどうか言うからじゃん。

樋口 真面目に考えてよ。

馳川 考えてる考えてる。大事な話だけどアプローチがねっていう話をしてるのよ。

樋口 アプローチを変えればいいの？

馳川 うん、だからさっき言ったみたいに統計を見るとかね。でも、どこかで割り切ら  
ないと身動き取れないよ。変態が絶対いないところなんて人間社会に存在しな  
いんだから。

樋口 それは存在するでしょ。

馳川 じゃあなんでもいいから挙げてみなよ。どこでもいいから。地名でも、建物でも。

樋口 ……教会とか。

馳川 教会はね……結構いると思います。

樋口 はあ？

馳川 だって、いろいろ聞くし。

樋口 いろいろって何よ。

馳川 嫌だよ、誰が聞いているか分かんないし。窓閉める？

樋口 いい。

馳川 ……そもそも、よく考えてほしいんだけど、今やってることって論理的にあんま  
り意味ないの分かってる？

樋口 なんでよ。

馳川 仮にね、今日もし変態がいなかったとするじゃないですか。それであなたは納得  
しますかって話なんですよ。納得して、じゃあ安心だからこの辺に部屋借りよう  
ってなりますか？ よく考えてみて。ならないでしょ。それはなぜかっていうと、  
別に今日いないからって、本当にいないかなんて分からないの。だって、たまた  
ま会わなかっただけかもしれないから。そうでしょ？ これは論理的にそうだか  
ら。要するに、何かが存在しないことを証明するのって、ほぼ無理なの。ほら、  
なんとかの証明って言うでしょ。知らない？

樋口 なんとかって何よ。

馳川 だから……知らないの？ えーと、ちょっと待って。

樋口 え、信じらんない。

馳川 違う違う、ど忘れど忘れ。あれ、なんでだろう。誰だっけ。誰かなんだよ。誰か  
ってことは分かっているの。

樋口 いや、あれだけ偉そうに言っというて。やば。

馳川 は？ そういうこと、あるでしょ？ じゃあ、ど忘れとか一回もしたことないわ

け？

樋口 論理的だのなんだの言っというて。きも。

馳川 だから、えっとね、え？ 誰だ。

樋口 信じらんない。

馳川 違うの、変態が！ 変態という言葉がずっと（頭に）入ってきてるの！ 変態変

樋口 態言ってるから！

樋口 どういうこと？

馳川 もう頭の中に変態しかない。

樋口 かわいいそう。

馳川 もういいや、変態の証明で。変態の証明だよ。

樋口 はあ？

馳川 変態の証明。あーあ。知らねーぞ、どうなっても。

樋口 待って待って、変態の証明？ それどういう意味？

馳川 だから……変態であるというなら、証明してくださいってことだよ。目の前で。

樋口 何言ってるの。

馳川 ちよっとやそつとじゃ認めませんからね！

樋口 馬鹿。

馳川 （切り替えて）でもさあ……、俺が言いたいことは分かるでしょ？ 君の気持ち

樋口 は分からなくもないし、真面目なところは嫌いじゃないけど、努力と見合っとな

馳川 いんじゃないのってことだよ。コスパ、大事だよ。

樋口 でも、もし今変態が発見されたら、そこで終わりってことでしょ。

馳川 ……その通り、分かっているじゃん。見つかったらね。そりや、うまくいけばいい

樋口 よ。そしたらこの辺はやめにしてもいいよ。でもそんなこと普通ない……

などと言っているところに、円山が入ってくるが、馳川しか気付いていない。円山はヤクルトの帽子をかぶっているが、服装は更にヘンテコになり、カメラのようになっている。切羽詰まった様子で辺りをキョロキョロ見渡し、やがて去る。

樋口 どうしたの？

馳川 いや……ちよっと他のところも見てみようか。ここはもう見たでしょ。

樋口 急にどうしたの。

馳川 やる気出てきちゃった。

樋口 まだ見てないよ。

馳川 （車）出すよ。

馳川、車を出そうとするが、円山が戻ってくる。今度は樋口も気が付く。円山は

相変わらず余裕のない雰囲気で辺りをキョロキョロ見渡し、会話の間にまた退場。

樋口 何あれ。

馳川 あれは……ヤクルトレディだろ。

樋口 あれが？

馳川 うん。

樋口 絶対違うでしょ。

馳川 いや、そうだって。だって生で見たことないでしょ？ ヤクルトレディ。

樋口 ないけど。

ほら。

……あ、赤信号！

急ブレーキ音。轆かれかけたらしい円山がフラフラ戻ってきて、そのまま座り込む。

円山 ああ……危なかった。あ、腰抜けた。

樋口 (馳川に) ……え、どうする？

馳川 え？ ……買う？ ヤクルト。

樋口 ちょっと本当にふざけないで。

馳川 いやでも、どうするって……まあ、スルーか、呼ぶかじゃない？

樋口 呼ぶ？

馳川 だから……警察に、通報するとかじゃない？

樋口 なんて？

馳川 なんてって……(円山を改めて見て) まあ通報してもいいレベルじゃない？

樋口 そうなの？

馳川 うん。

樋口 本当に？

馳川 いや、別にスルーでいいから、俺は。だからもう行こうよ。ね。

樋口 あの……。

馳川 (円山を見る)

円山 大丈夫ですんで、おかまいなく。

馳川 ……ほら、向こうも言ってるから。エンジンかけます。

樋口 (円山に) あの、どうしたんですか？

馳川 なんでよ……。

円山 いや、ちょっと……道に迷ってしまっ

樋口 道？

馳川 あ、僕らこの辺の人じゃないんですよ。なので道とかはちょっと分からないです  
ね。すみません。  
樋口 どこに行くんですか？  
馳川 いいって聞かなくて……。  
円山 どこに？  
樋口 はい。  
円山 ……。  
え？  
円山 あ、すみません。なんか、そんなこと聞かれてると思ってなかったんで。  
馳川 は？  
樋口 あの、迷ってるんですよね？  
円山 まあ……。  
樋口 だから、どこに行くのかなと思って。  
円山 いや……そんな……今会ったばかりの人に、ねえ、そんな。別に、どこってこと  
もないですし、ねえ。  
馳川 ……え、俺らが変な世界に迷い込んでる？ 大丈夫？  
樋口 ちょっと静かにして。  
馳川 (円山に) あのさ、いろいろ教えてくれないと分かんないでしょ？ 何も。  
円山 そんなこと言われても……。じゃあ、お二人は今、何してるんですか。  
馳川 は？  
円山 いや、何してるのかなと思って。  
樋口 家を探してます。  
円山 家？  
樋口 はい。  
円山 ……あ、(自分と) 同じ感じですか？  
馳川 いや違う違う違う。(樋口に) なんで余計なこと言うのよ。  
樋口 そうじゃん、だって。  
馳川 (円山に) デートです、デート。ドライブしてたんです。  
円山 あ、お付き合いされてて。  
馳川 ええ、まあ、  
円山 それはそれは。おめでとうございます。頑張ってください(と、親指を立てる)。  
樋口 やっぱ通報するわ。  
樋口 ちょっと待ってよ。  
馳川 110番だよ110番、こんなの。  
樋口 帰ればいいんでしょ？ もう帰るから、ね？ ややくしくしないで。  
馳川 いや、もはやここは市民の義務として通報すべきだと思う。

樋口 義務とか感じないで勝手に。

と、円山、倒れ込む。

樋口 あ……。

樋口 (気付かずに) これ警察になんて言えばいいんだ？

樋口 ちょっと、ちょっと。

樋口 何よ。110番するよ、マジで。

樋口 ほら……。

樋口 (円山を見て) ……119番か、119番だ。

樋口 なんですすぐ呼ぼうとするの？

樋口 いや、今これ全体的になんかおかしいから！ なんらかの緊急車両を呼ばないと！

樋口 ね？ 信号無視してでも来てくれる車呼ぼうよ！

樋口 落ち着いて！

円山 あの！ ……あの、私、大丈夫ですから。すみません。

馳川 樋口 ……。

円山 (立ち上がり) 今、何も分からない感じなんで、すみません。本当にちょっと、

よく分からなくて……。失礼します。

円山がフラフラと退場する中で暗転。

## 10

明転。約三十年前。前掛けを着け、スーパーのチラシとゼロハンテープを持った園長(兼古役)が立っている。

園長

平成……。停滞と閉塞と光化学スモッグに覆われた時代。人間社会は路頭に迷い、それはまるで航路を失った小さな舟が、夜の暗い海原を漂流するごとく。そんな平成という時代に一筋の光をもたらし、二十一世紀の明るい未来を切り開くべく降り立った、ひまわり組の皆さん。ここでこうして皆さんにお目にかかれたことを、私は心から誇りに思います。ここ、大和富士見栄本町幼稚園では皆さん、もう年長のお兄さん、お姉さんですね。私は園長として、皆さんが入園されたときから、日々の成長を見守ってきました。今はとても感慨深く思います。この、大和富士見栄本町はこの街の名前ですが、大人たちが揉めて一つに決まらず、全部ぶち込んでくっつけたというのが由来です。皆さんはせめて、二つくらいに収め

られる大人になってくださいね。さて、今日は担任のサエコ先生が皆さんにうんざりしてしまってお休みですので、園長の私から直々に、お話をさせてもらいます。(チラシを見せ) これは向かいのスーパのチラシです。私は今からこれを細長く丸めて、もの凄く硬い、手作りの剣を作ります。丸め方が緩いとふにゃふにゃの剣になってしまうので、それらしい剣を作るには一通りの技術が必要です。私はこの技術で、幼稚園教諭の免許を取得しました。皆さんもぜひ、お手本にしてみてください。さて……(チラシを広げて、一通り眺め) やっぱり安いな。卵1パック、ええ？ あ、本当に……(とか)。(チラシを丸め、セロハンテープで留める工程を進めながら) この剣は何に使うかというと、皆さん、来月に発表会がありますね。そこでは桃太郎のお芝居をしてもらいます。今日はその配役も決めなければいけません。役決めと言っても、先生は揉めたくはありません。時代も、争いごとを求めてはいけません。そこで、皆さんには原則、やりたい役をやっていただきます。役が重なるっても問題ありません。セリフと一緒に喋ればいいんです。余った子は木の役なんて都市伝説です。そんなこと、今やったら大問題です。木の役は先生がやりますからね。(剣が完成し) それでは、皆さんのやりたい役はなんですか？

園児たちが騒ぎ出す。以下、女兒Aは樋口役、男児Aは馳川役、女兒Bは遙役。園長は合いの手を入れるなどする。

女兒A

ねーねー、ミーちゃん！ 一緒におばあさん役やろうよ！ ゴシゴシ川でお洗濯してー、大きな桃持って帰って、きびだんご作ってー。楽しそうだよね！ 一緒にセリフしゃべってみようよ！ セーの！ 「おやおや、大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこー」

男児A

よーし、仲良し三人組は犬にするんだぜ！ あれ、犬って種類とかなんでもいいのかな。じゃあ俺ドーベルマン！ ケンちゃんはシェパードで……ヤスはボルゾイな！

女兒B

(二人とは違うトーンで) え、真奈美マジどうする？ いや、そりゃ実際だるいよ。それはそうなんだけど、仕方ないじゃん。……でもキジくらいじゃない？ いや、分かるよ。おばあさんとかの方がさっさと終わる説あるけど、あんまり早く終わっても親が納得しない可能性あるでしょ。うちの親そういうところあるから。で、キジってほら、犬、猿、キジで三番目だから。出づっぱじゃないよ。だいたい途中からだから。それでいてそこそこ見せ場もあるし。でしょ？ ね。(園長に) じゃあキジで。

園長

はい！ それではまず、桃太郎役をやりたい人。

園児三人は顔を見合わせる。佐倉井が恐る恐る手を挙げる。

園児　えーと、君は佐倉井周くんかな。他にはいないかな？

女子A　えー、シュウくんが桃太郎？　似合わない！

男児A　シュウの桃太郎なんかすぐやっつけられちゃうな！

女児A　今やっつけちゃう？

男児A　やっつけよう！　ウー、ワンワン！

女児B　よし、一旦シメときますか。

佐倉井　え、ちょっと、やめて……。

園児三人、佐倉井をボコボコにする。園長が慌てて止めに入る。

園長　こら、やめなさい！　喧嘩はやめなさい！　（制止し）そもそもストーリーが違

うから！　犬とキジは仲間だから。（女児Aに）あなたおばあさんって言ったた

でしょ。何してくれてんの。私、木の役ですから。木にあんまりしゃべらせない

で！　分かった？

少しの間、大人しくなる三人。だが、

女児A　じゃあ私、今だけ鬼の役。

男児A　俺も！

女子B　私も。

再び佐倉井をボコボコにする園児三人。

園長　だから、やめなさい！　ハウス！　ハウス！

そこに円山がやって来る。

佐倉井

（モノローグ）昔々。最初の記憶は幼稚園の頃。マルちゃんは昔から体が大きかった。後ろに隠ればすっぽりと覆われて見えなくなるような背中を、今でも覚えてる。彼は周りの園児をなぎ倒し、私は守られた。守られたのだが、彼は彼でまだ力加減が分からず、園児たちはそれなりに負傷し、園長は病気になる。その後、なんだかんだで発表会にはこぎつけ、桃太郎役は私とマルちゃんの二人となった。



佐倉井は円山の裾をつかみ、体を寄せる。円山はチラシの剣を持つ。

円山 (桃太郎のセリフ。以下堂々と、だが別に上手くはない) おじいさん、おばあさん。私は鬼ヶ島へ、鬼退治行ってまいります。

佐倉井 そもそも自分は、向いてないと分かっているながら、勇気を出して立候補したのであって、いざ舞台上に立つと、結局なんの演技もできなかった。セリフもほとんど出てこなかった。

他の園児 (劇中のセリフ) 桃太郎さん、袋の中には何が入っていますか？

円山 袋にはきび団子が入っているのだ。

他の園児 そのきび団子、お一つ私にくださいな。

佐倉井 舞台上でもずっと、マルちゃんの裾をつかんで縮こまっていた。桃太郎が桃太郎の影に隠れて震えている。こんな桃太郎はきっと日本中、他になかっただろう。

円山 さあ、きび団子を一つやろう。

他の園児 桃太郎さん、ありがとう。いざ鬼退治へ、お供いたしましたよ！

佐倉井 ……お供いたしましたよ。

以降、二人で歩きながら、だんだん時間が経過していく。佐倉井は円山の服の裾をつかんでいる。

円山 (笑い出す)

佐倉井 なんで笑ってるの？

円山 いや、なんか思い出しちゃって。

佐倉井 何が？

円山 幼稚園の時も、ずっとここつかんで。ほら、桃太郎やった時。覚えてる？

佐倉井 あ……。

円山 なんか意地悪された？ また。

佐倉井 ……いや。

円山 変わらないなあ、シュウちゃんは。

佐倉井 …… (掴んだ裾を離す)。

円山 (振り返り) おはよう。

佐倉井 ……。

円山 おはよう。

佐倉井 おはよう。

円山 学校行かないの？

佐倉井 ……またマルちゃんと同じクラスがよかった。

円山 それはしょうがないよ。

佐倉井 そうだけど。  
円山 あと2年待たないと。  
佐倉井 やだ。  
円山 行かないなら、先行っちゃうよ、学校。  
佐倉井 えー待って……。  
円山 じゃあ早くおいでよ。  
佐倉井 (袖をつかんでしぶしぶ歩き出す)

(間)

円山 何、どうしたの。  
佐倉井 ……なんでもない。  
円山 良かったじゃん、同じクラスになって。  
佐倉井 そうだけど。  
円山 何、やなやつ一緒に来た？  
佐倉井 ……。  
円山 ちょっとは自分で頑張りなよ。もう低学年じゃないんだから。  
佐倉井 そんなこと言わないでよ……。  
円山 分かったよ。分かったから。  
佐倉井 もう言わないで、約束ね？  
円山 分かったから。じゃあ、また明日。  
佐倉井 ……。  
円山 もう卒業だな。  
佐倉井 うん。  
円山 小学校……中学校。  
佐倉井 あんまり会えなくなるかな。中学卒業したら。  
円山 会おうと思えば会えるよ。  
佐倉井 そっか。  
円山 まだ卒業式あるし。  
佐倉井 そうだね。  
円山 うん、じゃあ、また。

円山、退場。  
しばらくその場にとどまる佐倉井。やがて、円山とは反対側に退場する。  
場転。

現在。馳川が寝っ転がってくつろいでいる。のんびりと、腕枕にあくびなどしながら大変リラックスした様子。雀の鳴き声など聞こえるかもしれない。まるで新居への引っ越しが一通り済んだ後のよう……だが、実際にはまた新たな内見先に来ているだけである。

樋口、入ってくる。

……え？ え、やば。何してんの？  
ん？

……内見中ですけど？  
知らん知らん。

やばいでしょ。

大丈夫、誰も見てないから。

いや見てないとかじゃなくて、お前が見ろよ、家。

見ない見ない。だってもう、ここは絶対ないから。

気に入らなかつた？

俺は最初からどこでもいいよ。

は？ どういうこと？

君が気に入らない、ということが俺にはもう分かった。

なんで分かるの？

もう物件を見る目が肥えちゃって肥えちゃって。一瞬で全部見えるようになった。  
やった。

んなわけあるか。

マジでマジで。

だとしても、私がどう思うかは分からないですよ。

物件に関しては君と同じくらいの目が養われた。そして俺は君のことを君自身よりも知っている。だから俺の方が分かる。おしまい。

何言ってるの。

じゃあここに決める？

見てないから分からないよ。

ほら、やっぱり。

え、何、機嫌悪い？ ふざけないでよ。

ふざけてない。じゃあ君について君より知ってることを言うよ。君は身の程知らずで夢見がちだ。そんなに賢くもない。俺たちの新生活の第一歩としての家に執

着している。ここから人生を変えてやろうと思っている。でもそんなことはできない。できないことに一生懸命になっている。それが君だ。

……それで？

……それでも何も無いけど。

終わり？

終わりにって言うか……。

じゃあ、いろいろ見て。早く機嫌直してね。

機嫌の問題じゃないから！ え、真面目に聞いてくれない？

だから何よ。分かりやすく言って。

馳川 え、なんで分かんないの？ だからね、ほら……あれだよ昔読んだ「青い鳥」！

いろんなところに出かけて幸せの青い鳥を探して、どこにも見つかりません、家に帰ったらいました青い鳥、幸せはすぐそばにありました。今あれそっくりだと思っただよ。だからもう、青い鳥を追いかけのはやめて、家に帰ろう！ ……

…家が無いけどね！

何言ってるのさつきから。

ちよつと、不動産屋さん！ 不動産さん？……（間）不動産屋！

樋口 馳川

佐倉井、ではなく兼古が出てくる。

はい？

何してんの。

何かありましたか。

いやいや。

あ、（この物件に）決めちゃいます？

決めちゃいけません。なんでそっちいんの。

いや、なんでということもないんですが。

なんか説明することとかないわけ？

説明すること……うーん。

なんでもいいから聞いてて。お風呂場見てくる。

樋口 兼古 馳川

樋口、退場。

馳川 （間）……前の担当の人って、なんで休んでるの？

兼古 佐倉井は、ちょっと体調不良でして。

馳川 メンタル？

兼古 え？ いや、なんと言うんでしょうね。

馳川 いや、おたくの会社、大丈夫かなと思って。ブラックなの？  
兼古 はい？

馳川 その人もそうだし、あなたもなんか、お疲れというか、ぼんやりしているという  
か。

兼古 佐倉井に関しては、会社がどうかということではないと思います。  
馳川 そうなの？

兼古 まあ、あんまり言うとおれですけど。  
馳川 あなたは？

兼古 私ですか？ 私はそもそも……特になんかというか。  
馳川 いたって健康？

兼古 はい。  
馳川 それで、ずっとこんな感じ？

兼古 まあ……こんな？ はい。  
馳川 ぼんやりと。

兼古 自分ではなんとも言えませんが。  
馳川 職場で怒られない？

兼古 そうですね、特には。  
馳川 ……じゃあ、めっちゃホワイトかもしれない。  
兼古 ……？。

馳川 なんか、うん。良かったわ。  
兼古 そうですか。

馳川 じゃないよ。言っておくけど、俺らの仲をフォローすることもおたくの仕事のう  
ちだからね？

兼古 ええ？  
馳川 そりゃそうでしょ。

兼古 どうでしょうかね。  
馳川 だって、もし俺らこのまま別れちゃったら家借りる話全部なしよ？

兼古 全部おじや  
ん。

馳川 おじやん。  
兼古 そうでしょ。誰も幸せにならない。言ってること間違ってるやね。だって、じ  
ゃあ、別れたらどうする？

兼古 その時はまあ……お二人それぞれのお家を探しましょうか？  
馳川 ええ！？

兼古 少なくとも我々は幸せになりますから。  
馳川 サイコだったんかい。

兼古 私ども、一応東京一円持ってるんで、絶対に偶然再会したりしないように端と端

のお家を紹介させていただきますよ。(考えて) あ、王子と八王子ってどうですか(笑)。

遠い！ いや絶対嫌でしょそんなの。

大丈夫です大丈夫です。お兄さん王子でいいじゃないですか。向こう八王子にして。

そういう問題じゃない！ てか別れないから！ 何で勝手に話進めようとするの？

いつの間にか戻っている樋口。

樋口 ここも(別に)いいかなあ。次も見てみたい。先出てるね。(また退場)

馳川 ……(兼古に) お名前なんでしたっけ。

兼古 兼古です。

馳川 兼古さん。

兼古 はい。

馳川 (真面目に) 僕らをタワマンに連れてってください。

兼古 タワマン？

馳川 最高級のタワマンの、最上階の一番いいところって、逆に賃貸だったりするじゃないですか。

兼古 そうですね。そういうところはありますが。

馳川 彼女もきつと気に入ってくれると思うんです。

兼古 まあ、かもしれませぬね。……え、借りるんですか？

馳川 いやいや、借りれるわけないでしょ。

兼古 ……ん？

馳川 目もくらむような場所に行けば分かると思うんです。自分がやっていることがいかに虚しいか。

兼古 ……。

馳川 可哀想な人なんですよ。つまらないことを真面目に考えすぎて。本当は大した差なんてないのに。頑張れば頑張っただけ報われると思ってる。間違っているんです。嫌なんですよ。

兼古 ……。

馳川 ね、今から探しましょう。

兼古 待ってくださいよ。はなから借りないって言ってる人に案内できませんよ。こっちも仕事ですから。

馳川 大丈夫ですって。多分、普段からそんなに働いてないでしょ？

兼古 何てこと言うんですか。

馳川

今のは言い過ぎましたけど、こっちだって必死なんですよ。一回タワマン登った方が結果的に近道ですから！

馳川と兼古、退場。

12

熱波の路上。車の行き交う音。円山がフラフラと出てくる。服装は更に乱れ、いよいよ訳の分からない感じになっている。なんだか分からない荷物もたくさん持っている。呼吸は浅く、立ち止まり、なお歩こうとするが行き倒れてしまう。荒い息づかいだけが聞こえる。ややあつて、遙が現れる。遙は日傘を差している。

円山

あ……あの、これ特になんでもないので、気にしないでください。

遙

救急車呼びます？

円山

あ、そういうのは……あの……お水とかあります？

遙

(バッグからペットボトルの水を取り出して)これ、いいですよ。開けてませんから。

円山

いいんですか？ ごめんなさい。(水を飲み)あの、どこかでお会いしましたっけ。すみません。ちよっと頭が……。

遙

(道路に転がっている円山の帽子を拾おうとする)

円山

ああ……(なんとなく嫌がる)。

遙

(手を止める)

円山

あの、いいです。ごめんなさい、自分のなんで(と、回収する。が、以降相変わらず倒れ込んだまま)。

遙

暑くないですか。

円山

暑いですね、特に上が。

遙

脱がないんですか。

円山

いや、脱ぐなんてそんな。

(間)

円山

あの、お水ありがとうございます。僕、大丈夫なんです。

遙

……。

円山

本当に、大丈夫ですから。

遙

何が好きですか？

円山 え？

飲み物。

円山 ああ……あの、まあ、何でも大丈夫です、はい。

遥 麦茶？

円山 ああ……麦茶は、好きです。

遥 コーラ？

円山 コーラは、はい、もっと。

遥 ジンジャエール？

円山 あー……コーラですかね。はは。

遥 暑くないですか。

円山 暑いですね。夏ですからね。

遥 ええ、特に最近は。

円山 そうですね。どうしちゃったんですかね。

遥 虫もいない。暑すぎで。

円山 ああ……そうかも。蟻もいない。(と、見て) あ、ちょっといた。

遥 地面、熱くないですか？

円山 地面は……熱いです。ちょっと待ってください。(と、何とか接地面を減らす動き)

遥 ああ、ちょっと涼しくなりました。

(間)

遥 子供が生まれるんです。

円山 ……そうなんですか。それは、おめでとうございます。

遥 経過も順調で。

円山 よかった。え、大丈夫ですか、こんなところで。

遥 昔は子供なんて絶対生まないと思ってました。

円山 そうですか。

遥 子供を生む人は愚かで浅はかだと思ってました。むごいとも思っていました。

円山 そんな。はは。

遥 だって、未来になんの希望もないのに。

円山 そんなことないですよ。

遥 本当はね、羨ましかったです。周りの希望と自分の希望が一致する人が。

円山 ……。

遥 学生時代、子供を生みたいと思ったことは一度もありませんでした。でも、子供を生みたいと思う人にはなりたかった。周りと自分の希望が一致する人になりたかった。言ってること、分かりますか。



円山 ……そうですね、何となく。

遥 でも、そんなのは本当なら叶わぬ夢でしょう。違う人間になりたいと言っているわけです。

円山 まあ……。

遥 でも、私はいつしか子供が欲しいと強く思うようになりました。結婚して、幸いにも、こうして子供のために病院に通う日々を過ごしています。周りにも祝福の言葉をたくさんもらいました。これからも、もらうでしょう。私の夢は叶ったわけです。

……。

遥 エコー検査というのがあって、子供の顔が見えるんですよ。結構はつきりと。まだ人間かどうか定まっていけないような顔ですけど、それを見て、愛情のようなものが湧くんです。昔とは違う人間の私が。

円山 (間。水を飲む)

遥 思い出しますか。

円山 え？

遥 昔のこと。

円山 (間) ……そうですね。人より思い出す方かもしれませんね。

遥 何を思い出しますか。

円山 今は……暑い日には、夏休みのことを思い出します。小学生の頃は、よく、近所のマンションで鬼ごっこをしていました。

遥 マンションで？

円山 団地の中で一番大きいマンションは十階建てで、それを上から下まで丸々使って鬼ごっこするんですよ。楽しそうでしょ？

遥 怒られないですか。住んでる人に。

円山 怒られないと思いますか？ まあ、今よりはまだみんな甘かった。(水を飲み)

遥 エレベーターがついてたんですけどね、逃げる側は使ってはいけないというのが常識でした。なんでか分かりますか？

遥 ……なんででしょう。

円山 だって、降りたところで乗ってくる鬼と鉢合わせたら絶対捕まるでしょ。

遥 確かに。

円山 そう、確かにそうなんですけど、話にはまだ続きがある。小学生なんて単純ですから、鬼の動きは大抵パターンが決まってくる。上から下へ階段を降りながら探して、下の方に降りたらエレベーターを使って上に上がってまた探す。それが一番都合が良い。つまり、鬼は十階や九階からエレベーターに乗ることはない。なるほど。

円山 エレベーターを十階に止めてね、ボタンを押さないで中にずーっと隠れてるんで

遥

すよ。たまに動き出したらボタンを押して九階で降りる。鬼をやり過ごして、また十階でエレベーターに乗る。ずっとずっとエレベーターの中にいる。鬼は上の階ではエレベーターに乗らないから、絶対に鉢合わせない。

円山

これでも昔は、周りより要領が良いこともありました。……これでも(と、自分の身なりを示して)。

遥

(さほど反応を示さず、黙って円山を見ている)

円山

仲の良い友達が一人いて、いつも一緒にいました。そいつにだけはね、この作戦を教えたんです。鬼ごっここの時は一緒に逃げて、マンションの一番上のエレベーターの中で二人、一応声は潜めながら、ずっとくだらない話をしていました。一度なんか他の子がみんな帰っちゃってからも、暗くなるまでひそひそ話を、飽きもせず、ずっと、ずっと……。

遥

素敵な思ひ出。

円山

最近、何十年ぶりにその人と会ったんです。立派になってました。正直、子供の頃は駄目駄目で、いつも酷い目に遭わされていたようなやつだったから驚きましたけど、でも嬉しかった。すみません、自分の話ばかりで。

遥

いえ。

円山

(水をたくさん飲み) あー、生き返る。

遥

(笑って) なんか、砂漠のオアシスみたい。

円山

え、これ(水)が? ……私が?

遥

蜃気楼。あなたは本当にそこにいるのかしら。

(間)

円山

どこかでお会いしましたか?

遥

未来はどうですか。

円山

未来?

遥

未来のことは想像しますか?

円山

ああ……。未来ですか。未来は……ちょっと分からないですね。

遥

分からない?

円山

ええと、今考えようとしたんですけど、ぼんやりしちゃって。

遥

ぼんやり。

円山

未来ってなんでしよう。

遥

想像して想像して、ますます訳が分からなくなって、自分の弱さばかりが際立って、手に入らないものだけは思い知らされて、今持っているものすら何もないことに気付いて、苦しくて、それでも考えることが止まらなくて、そうしていたら、

ある時からずっと、ぼんやり。いろいろ考えたことは全部忘れてしまった気もするし、本当は全部覚えている気もする。朝起きれば、ただ何かを必死で考えていたという記憶と、疲れと虚しさだけが残っている。

……。

今のは私の話ですけど。

……。

風が出てきましたね。

私のこと、なんだと思ってます？

なんなんですか？

知ってたら、教えてほしいと思って。このままだと溶けるかポップコーンになっちゃいそうで。

分かりません。

そうですか。

いつの間にか佐倉井が立っている。寝起きのような格好。

円山 シュウちゃん。

マルちゃん。

円山 (遥の正体に気付き) ああ、そうか、あの時……。 (佐倉井に) いや、たまたま会ってさ。

佐倉井 もういいよ、マルちゃん。

円山 え？

佐倉井 もういい。思い出したよ、いろいろ。だから、行こう。

円山 どこへ？

佐倉井 マルちゃんが帰るべきところへ。

円山 ……。

佐倉井 行きたくない？

円山 …… (間) 分からない。

佐倉井 分からないってことないでしょ。

円山 行きたくない気もするけど、多分このままだと溶ける。溶けるかポップコーンになる。

佐倉井 じゃあ行こう、今すぐ。ポップコーンになる前に。

遥 今から？

佐倉井 うん、ごめん。すぐ帰ってくるから。新幹線と電車乗るけど。

遥 (笑って) そのまま (の格好で) 乗るの？

佐倉井 (自分の服を見て) 大丈夫でしょ、まあ。マルちゃん、こんなんだし。

遥 そう。  
佐倉井 うん。  
遥 あと一個だけ確認していい？  
佐倉井 何？  
遥 過去ってそんな大事？  
佐倉井 ……まあ、一応。

場転。

13

電車の中。既に東京は遠い。佐倉井と円山が並んで座っている。じろじろ見られているらしい。

佐倉井 (見ていた乗客に向かって)おい、てめえ何見てんだよ！ 見せもんじゃねえぞ！  
円山 シュウちゃん。  
佐倉井 いや、見てただろうが。こちとら分かってんだよ。何がおかしいんだよ。言ってみろよ。  
円山 シュウちゃん。  
佐倉井 次の駅で降りるか！  
円山 シュウちゃん！  
佐倉井 ……マイルドヤンキーが(席に戻る)。  
円山 ……。

(間。電車の音が続く)

佐倉井 ちょうど思い出したのもあって。  
円山 え？  
佐倉井 ちょうど、この位置関係で座ってた。  
円山 誰が？  
佐倉井 思い出せないけど、中学の同級生。  
円山 いつの話？  
佐倉井 大学の頃かな。本当は昔の車両だと、あそこはボックス席だったんだけど。  
円山 そうだったけ？  
佐倉井 覚えてないか。俺は高校から電車で乗ってたから。

円山　いい高校受かったもんな、シュウちゃん。  
佐倉井　うん、受かって、友達も結構できて、何て言ったらいいかあれだけど、あの時は人生が良くなっていく音がこう、聞こえる気がしてたのかな。それで、マルちゃんとは、だんだん疎遠になっていった。  
円山　普通のことだよ。いろいろ変わっていくんだから。  
佐倉井　会いたいとは思ってたんだよ。  
円山　うん。  
佐倉井　でも忙しいのもあって、なかなか連絡が取れなかった。  
円山　そっか。  
佐倉井　ある日、いつものように学校から帰る時ね、ここから見たその席に、中学の同級生が何人かいて、とっさに寝たふりをして顔を伏せた。もう名前も覚えていない。そいつらは、マルちゃんの話をしてた。  
円山　なんて？  
佐倉井　あいつはもう駄目だって。  
円山　……。  
佐倉井　国道沿いの古本屋で誰かが見たのが最後だって。高校行ってから何もかも上手くいかず今じゃ引きこもりだって。すごい笑ってたよ。  
円山　……。  
佐倉井　それを聞いて怒るべきだったけど、悔しくても怖くて黙っているのも仕方なかったと思う。  
円山　それはいいでしょ。  
佐倉井　まあ、それならそれでよかったんだけど。  
円山　うん。  
佐倉井　実際は何を思ってたかという話でね。  
円山　何を？  
佐倉井　「ああ、俺がマルちゃんじゃなくて良かった」  
円山　……。  
佐倉井　上手くいってるときって、そんなもんかね。俺が薄情なだけか。  
円山　……俺に聞いている？  
佐倉井　いや。  
円山　なんだよ。  
佐倉井　その時も考えたって話でね。まあ、いずれにしても、もう合わせる顔がないなど。だって、そんなこと思っちゃうんだから。だから会いに行くこともなかった。ああ、でも、あー。  
円山　何、何、どうしたの。  
佐倉井　それもこれも全部言い訳かね？　合わせる顔がないとかさ。結局はもうどうでも

良かったのかもしれないね、面倒臭かったのかもしれないね、マルちゃんとかなんとかさ。

円山 今日によく喋るな。

佐倉井 マルちゃん。

円山 うん。

佐倉井 マルちゃんがここにいるのは、俺は、復讐だと思ってるよ。今のところは。

円山 ……。

佐倉井 もう着くな。大和富士見栄本町。

やがて電車が止まり、扉が開く。佐倉井、円山の順に降りる。

佐倉井 夕方になっちゃったな。行こうか。

佐倉井、退場。ややあって円山も退場。

### 13

同じ頃。都内でも有数のタワマン、の最上階の部屋。馳川と樋口、兼古。馳川は落ち着かない様子で一通り室内を見渡し、

馳川 (樋口に) さあ、どうですか！

樋口 どうも思わないよ。借りないでしょ、どうせ。

馳川 そうだけど、そうじゃなくてさ……悩みなんて、ちっぽけに感じられないか？  
樋口 いい話をしに来たの？

馳川 だからそういうことじゃ……ああ、もう(苛立つ)。(兼古に気付き、近寄って)  
兼古 なんているの？

馳川 なんて、やる気出しちゃってるんですか。

兼古 やる気はないですよ。借りないでしょ？ 私、大した人生送ってませんけどね、それでも今が人生で一番無駄な時間ですよ。

馳川 じゃあ、なおさらここもついいじゃないですか。下によさげな喫茶店ありましたよ。

兼古 行くわけないでしょ。あのね、何する気ですか？ てか揉めるんでしょう？ 絶対。

馳川 ここはまずいですって。何か壊したらとんでもないことになりますよ。大丈夫ですから。とりあえず隣の部屋でお願いします。ね？

兼古  
馳川 どういうことなんですか。  
いいからいいから。

馳川、兼古を強引に退場させる。

樋口 何を一人でテンパってんだか。

馳川 ……アヤちゃん。今日は言いたいことがある。

樋口 何。

馳川 もっと、いろいろ諦めてほしい。

……。

馳川 アヤちゃん。君の努力はほとんど全て無駄に終わる。それはきっと明らかだ。君は愚かだ。でもそれは君のせいじゃない。この世の全てのこの結果として今、君という人間がいる。君は自分の愚かさにも責任を持ってない。それはおこがましいことだ。ただ、君と一緒にいる人間として、俺は一つだけ、諸々ひっくるめて本当に一つだけ心配がある。いつか、何もかもが変わらないと悟った時、君の心がぼっきり折れる時が来る。必ず来る。俺はその瞬間だけはどうしても見たくない。きつと目をそらしてしまうと思う。

……そう。

樋口 人生は身の程を知る旅だ。誰にだって絶望はある。でも、たとえ転ぶことがあっても、決して高いところから落ちてはいけけない。君はずっと崖の上を走っているように見える。君には心から呆れてもいたけど、それ以上に苦しかった、本当だ。空回りし続ける君を見ていられない。俺の真心が耐えがたい。

樋口 うん。

馳川 だから、もう勘弁してくれないか。

樋口 ……だから、いつもあなたはそんな感じなのね。

馳川 は？

樋口 諦めの殻に閉じこもって、自分の人生の空しさに怯えているのね。

馳川 俺の話じゃない。

樋口 自分の力では何も変わらない。何も変えられない。期待はしない方がいい。そんな現実をちゃんと理解して、でもどうしても受け入れられないのが、あなたなのね。

馳川 そうじゃないって……。

樋口 (窓から外の景色を見て) 決して手に入らない風景があることが悔しくて仕方ないのが、あなたなのね。

馳川 俺の話はしてないだろ！

樋口 (馳川を見て) ……自分が連れてきた癖に。

馳川

……。

馳川

いいの。みんなそうだから。でも、お互い極端だねえ。

馳川

……。

樋口

馬鹿なのは認める。でも私は最善を尽くしただけなの。だから真んだけ受け取っておくね。ありがとう。

馳川

俺たちはきつと別れるだろうね。

樋口

どうして？

馳川

どうしてってことはない、今にも別れそうなのに。

樋口

そう？

馳川

別れたいでしょ？

樋口

うわ、最低。人のせいにして。別れたいの？

馳川

別れたくない。

樋口

じゃあ、いいじゃん。

馳川

でも、少なくとも一生にわたっては、俺は君の期待に応えられる人間ではないと思う。

樋口

うん……。その思いもみんな、あなただけの話。

馳川

それが分からない。

樋口

分からないならいいんじゃない。

馳川

……こんな景色は最初で最後だろうな。

樋口

スカイツリーの展望台の方が高いよ。

馳川

そういうことじゃない。

樋口

そういうことだよ。てか行ったでしょ、スカイツリー。

馳川

行った。

樋口

初デートで。

馳川

そんなダサイカップルいる？

樋口

お前が誘ったんだよ。

馳川

……え？

樋口

え？

馳川

マジで？

樋口

え、マジで忘れてたの？ やば、こいつ。

馳川

そうか。そんな感じだったか俺……。

(間)

樋口  
馳川

今、二人でいることは運が良かったと思ってよ、私は。俺もそう思う。



樋口 じゃあ今はそれでいいでしょ。

馳川 でもさ……。

樋口 何？

馳川 家は決めたい。

樋口 (笑って) そうね、そろそろね。まあ、でもせっかくだからもうちょっとゆくりしていかない？

馳川 ここで？

樋口 展望レストランみたいなもんでしょ。

馳川 うわー。

樋口 なんか面白い話してよ。

馳川 なに、急に。

樋口 最近なんかなかった？

馳川 ……不思議な話ならあるよ。でも(君も)知ってるけど。

樋口 なんかつて？

馳川 え？ だから……ヤクルトレディ。

## 14

馳川と樋口は静止している。

佐倉井と円山が入ってくる。円山の自宅の前。蟬の声。

佐倉井

君が死んでいるとしたら、どこに行ってしまったのかは分からない。天国かもしれないし、地獄かもしれない。極楽かもしれないし、虫か動物に生まれ変わっているかもしれない。でも、もし君がまだ生きているとしたら、どこにいるのかは知っている。いや、知っていた。(円山の自宅を見上げ) マルちゃんはどこにも行っていない。あの頃からずっとずっと、ここにいます。

円山

そうなのかあ。よく分かるな。

佐倉井

ずっと一緒にいたから。

円山

シュウちゃんの知らないうちに、どこか遠くに行って元気でやってるかもしれない。

佐倉井

それはない。

円山

どうして。

佐倉井

ないでしょ？

円山

……。

佐倉井

マルちゃんは平凡な人だ。ということが昔の自分には分からなかったけれど、今

はよく分かる。だから君のそばにも誰かがいた方がよかった。俺にとってのマルちゃんみたいに。

……改めて見上げると、ぼろっちい家だなあ。道路のひび割れとか、こんなやつからあったか分からん。これ直す気ないのかなあ。あ……(地面を見て)ほら、「トレマ」。「生まれ」が入れ違ってるやつ。街の外れとはいえ、これ直さないだからな。凄いやな、この街。終わってるんだろいうな。

佐倉井  
丸山

うん。

佐倉井  
丸山

今、心からがっかりしている。

佐倉井  
丸山

ここまで来ても、君に掛ける言葉が見つからない。

丸山

……いいんだよ。それだけ時間が経ったんだから。人間、それぞれなんだから。そうでしょ。

佐倉井  
丸山

昔のマルちゃんはそんなこと言わなかった。

丸山

子供の頃でしょ？

佐倉井  
丸山

子供の頃の借りは返せないのか。

別に何か貸したわけじゃない。それに、ここまで送ってくれてありがとう。俺が帰るべきところはここで間違いない。なんかほら、ちょっと元気になってるし。ポップコーンにならなくてよかった。

佐倉井  
丸山

……。

丸山

長いなあ、人生。

佐倉井  
丸山

うん。

丸山

まだ半分以上ある。

佐倉井  
丸山

でも。

丸山

ん？

佐倉井  
丸山

年を取ると時間が経つのは早くなるって言うし。

丸山

でも世の中の流れはもっと早くなる。

佐倉井  
丸山

……そうだね。

丸山

追いつくのも大変だ。

佐倉井  
丸山

……。

丸山

余計なこと言ったな。じゃあ。

佐倉井  
丸山

……ん？ いや、えっと……。

丸山

あ、今たぶん、同じことを考えてる？

佐倉井  
丸山

……いや、ちょっと待って。

俺がこの家に入ったら、全てが元通りになる。何もかも、なかったことになる。そして、シユウちゃんはこれまでのことを全て忘れるだろう。もちろん、俺も忘

れる。

佐倉井 いや、そんな……何それ？ え、そんな感じ？

円山 うん、そうだよ。全部忘れる。でも、そう思うでしょ？

佐倉井 そんなの……変でしょ。

円山 そう？

佐倉井 いくらなんでも……。

円山 でも忘れてたでしょ？ 俺のこと。

佐倉井 ……それは、

円山 別に怒ってるわけじゃない。全て元に戻るといことだから。そして君はここで引き返す。それで全部おしまい。

佐倉井 ……。

円山 たまたま同じ街で生まれて、同じ学校で過ごして、でも、それだけっちゃそれだけだもん。あの頃だけでも、一緒にいれてよかったよ。

佐倉井 ……じゃあ今さら来るなよ……。

円山 そうだな。でも、復讐とかじゃないかな。それは言える。だって、普通に楽しかったし。

佐倉井 ……。

円山 まあ、いいや。じゃあね、シュウちゃん。(と、ヤクルトの帽子を外し) ……なんだったかな、これ。まあ、いいや。じゃあ、頑張ってたな。

円山、退場。

(間)

佐倉井 (弾かれたように) マルちゃ……！

再びタワマン最上階の部屋。

樋口 いや、だから結局なんだったのあれ？

馳川 だからヤクルトレディだって言ってるじゃん。

樋口 違う違う、マジな話。

馳川 でも、今思えばガチでヤクルトレディだった説ない？

樋口 ないない。え、ちゃんと覚えてる？

馳川 じゃあ何よ。

樋口 だから知らないって。

馳川 アーティスト的な？

樋口 何の？  
馳川 分らないけど。  
樋口 (アーティスト) だとしたら、コンセプト何って話になるから。  
馳川 そうだけど、今考えると、なんらかコンセプトあったと思うんだよね。  
樋口 うわ、また適当言ってるわこいつ。  
馳川 いや、思わない？  
樋口 全然。  
馳川 じゃあ、なんだったと思う？  
樋口 考えたって無駄でしょ。所詮は他人なんだから。  
馳川 いや、そうだけどさ…… (間) ……あれ？  
樋口 ん？  
馳川 今さ……。なんの話してた？  
樋口 は？  
馳川 今、なんの話してたっけ？  
樋口 え？ それは…… (間) なんか面白い話しようって。  
馳川 だから、その面白い話。  
樋口 …… (それ) は、まだでしょ。  
馳川 ええ？  
樋口 え、大丈夫？  
馳川 いやいや、こっちのセリフだから。今よ？ 本当に今。ナウ。十秒前。ちょっと  
待って……え？ 気のせい？ (考え込む)。  
樋口 どういうこと？  
馳川 …… (間) あ、思い出した！  
何。  
馳川 悪魔の証明だ。  
樋口 は？  
馳川 悪魔の証明。  
樋口 の話してた？ 今。  
馳川 ごめん、全然関係ない。  
樋口 はあ？  
馳川 いや、だから前その話になったじゃん。全然出てこなかったやつ。今、突然思い  
出した。  
樋口 は、マジでなんなの？ 自分から聞いたって。  
馳川 違う違う。こういうのっていつ降りてくるか分からないじゃん。それが今だった  
ってだけだから。これはだって、どうしようもないでしょ。あるでしょ？ シャ  
ワー浴びてるときとか。

樋口 めっちゃリラックスしてるじゃん、一人で。

馳川 じゃなくて。

樋口 帰る。

馳川 待って待って、ごめんマジで。

馳川と樋口、退場。

タワマンに置き去りにされた兼古、ではなく、校長が現れる。正装に、胸にはコサージュを着けている。

校長

（咳払いなど）えー、今日この日をもって、大和富士見栄本町中学校を卒業される皆さん。私は校長として、新世紀へ意気揚々とはいばたく皆さんを心から誇りに思います。昨今、ポケットモンスターなるものが大変ブームのようですが、ゲームは決してやりすぎないように。そう、皆さんはもう義務教育という名の青春を終え、大人の入り口に立っているのです。そして賢い皆さんは、この世の真実についてもうほとんど気がついていることでしょう。即ち、この世界はひどく退屈である。世の中はもう良くも悪くもならない。そして自分は英雄にはなれない。誰もが代わり映えのない、平凡で平坦な人生を送るのだ。……そんな、愚かな皆さん、見通しの甘い皆さんに私から言える言葉は一つだけです。卒業おめでとう！

と、家の前の場面に戻る。蟬しぐれ。呆然と立ち尽くす佐倉井。なぜ自分がここにいるのか分かっていない。長い沈黙。辺りを見回し、円山の家を見上げる。そして、その場を立ち去る。  
長い間。

やがて、佐倉井が戻ってくる。円山の家を見上げる。蟬の声。暗転。

暗闇の中、かつての二人はひそひそを言葉と交わす。

佐倉井 ねえ、マルちゃん。

円山 ん？

佐倉井 大人になったら何になる？

円山 何、いきなり。

佐倉井 野球選手？

円山 なんで？ いや、無理無理。

佐倉井 なんで。

円山 それは無理でしょ。

佐倉井 分かんないじゃん。マルちゃん体大きいし、野球上手いし。  
円山 そんなんでなれるもんじゃないよ。  
佐倉井 入るとしたらどこ入りたい？ 巨人？  
円山 巨人なんか絶対無理でしょ。  
佐倉井 じゃあ、どこ？  
円山 えー……。ヤクルトとか？  
佐倉井 ノリノリじゃん。  
円山 違う、だって聞いてきたから……。え、シユウちゃんは？  
佐倉井 俺は分かんない。  
円山 うわ、ずる。  
佐倉井 だって、本当に分かんないんだもん。  
円山 じゃあ今真剣に考えてよ。  
佐倉井 じゃあマルちゃんもね。  
円山 ……うん、分かったよ。

(間)

佐倉井 ねえ。  
円山 ん？  
佐倉井 ずっと一緒にいるかな。  
円山 分かんないよ、そんなの。  
佐倉井 えー。  
円山 でも、一緒にいないことってあるのかなあ。  
佐倉井 ……うん。  
円山 ……あれ？  
佐倉井 え？  
円山 動いてる？  
佐倉井 ……動いてる！ 早く！ 九階押して！  
円山 ちょ、あ、足痺れた！  
佐倉井 ええ！  
円山 だって、ごめん、本当無理！ シユウちゃん押して！  
佐倉井 え、ちょ、ちょっと待って！  
円山 押して！ 早く！ 押して！

玄関のチャイムの音。

薄暗い明かりがつかくと、部屋着姿の円山が後ろ向きに座っている。佐倉井はそれ

に向き合い立っている。

佐倉井

マルちゃん。俺だよ、俺。覚えてる？ 久しぶりだな、マルちゃん。なんか……来ちゃった、よく分からないけど。別に何があったというわけでもないんだけど。話すことも……そんなになんだけども……また会えて良かった。マルちゃん……覚えてる？

円山

……（顔を上げて）シュウちゃん。

佐倉井

……変わらないなあ、マルちゃん。

おわり